
特 別 寄 稿

春木先生のご退職にあたって

A Profile on Professor Yutaka Haruki

鈴木 晶 夫*

Masao, Suzuki

春木先生とともに早稲田大学での生活も学生時代から合計するとそれなりの長さになってしまいました。自分の人生の半分以上にも及びます。その間、先生から研究だけでなく、人間関係、人生等々、いろいろなものを学ばせていただきました。

先生は、1958年に文学部の副手になられてから、助手、講師、助教授、教授に。1987年には大学創立100周年を記念して創設された人間科学部の設立準備にもかかわられ、教授として嘱任されました。

先生の研究を業績から概観すると、編著書=25冊、分担執筆=76冊、辞典類分担執筆=12冊、翻訳(監・編・分担訳)=16冊。研究論文としては、ラットを使った回避条件づけ=8編、模倣・観察・社会的学習=15編、人間の強化=13編、健康心理学=6編、行動の理論・行動療法=23編、人間科学=8編、身体心理学=20編、東洋思想・東洋医学=16編、その他=12編、学会発表=219編、報告書=20編にもものぼります。

研究だけでなく、学会活動でも、日本動物心理学会、基礎心理学会、日本心理学会、異常行動研究会(現在の日本行動科学学会)、日本健康心理学会、日本行動分析学会、人体科学会、日本行動療法学会などの理事や常任理事、会長などをお務めになっておいでです。また、社会活動としては、調和道協会、日本学生武術太極拳連盟、日本武術太極拳連盟、国際植物療法協会、Zenカウンセリング協会などの理事や会長をお務めです。人事院国家公務員I種採用試験専門委員や大学評価・学位授与機構の学位審査会専門委員などもお務めでした。

先生はその時代時代で、またそれぞれの研究領域で最先端の研究をされておいでで、現在もその姿勢は変わっていないようです。1977年の特別研究期間(国内研究員・学術振興会流動研究員)の機会には、単身で1年間、九州大学教育学部の成瀬先生のところに勉強にでかけられ、1979年の在外研究では、Stanford UniversityのBandura, A.先生のところにでかけられました。その後の先生の研究に大きな影響を及ぼしたものと推測されます。

先生の活動の場は日本にとどまらず、アメリカ、ヨーロッパは言うにおよばず、アジア、オセアニアなど世界にも目を向けておいでです。1990年から2002年まで、Transnational Network for the Study of Physical, Psychological & Spiritual Wellbeing という国際的な集まりのDirectorとして活躍されておいででした。2003年からは、The Society for Constructivism in the Human SciencesのHonored Contributorとしてご活躍です。これらの活動に係わった、あるいは関わっている方々として、Mahoney, M., Kabat-Zinn, J., Shapiro, D. (USA), Blows, M. (Australia)、

* 早稲田大学 人間科学部・人間科学研究科

DelMonte, M. (Ireland)、Kwee, M. (the Netherland)、de Silva, P. (UK)、汪衛東 (中国) (以上、敬称略) と、私が知っているだけでもいろいろな国々に及んでいます。

1990年からは、校友の井深大氏から寄附を受け、東洋医学の人間科学プロジェクトとして、寄附講座「東洋医学の人間科学」(歴代講義題目・担当者については <http://chabashira.human.waseda.ac.jp/users/masao/index.html>を参照)、上記の Transnational Network for the Study of Physical, Psychological & Spiritual Wellbeing、中国中医研究院との学術交流、東洋医学関連のシンポジウムの開催をすすめてられました。これらは、「気は物質か 一気の本質をさぐる」「世界における東洋医学研究の現状」「からだところ 一身体としての精神、1994」「気を測る 一気の計測、1994」「医療気功に関する日中学術交流」などの報告書や「Comparative and Psychological Study on Meditation」「Bodywork and Psychotherapy in the East」などの著書にまとめられています。

研究だけでなく、ご自身でも呼吸法、ヨーガ、太極拳などを実践され、演習授業やゼミ合宿、各種研修会などでも講義・講演・実践されておいでです。その一貫なのでしょう、春木ゼミはこの何年間か、夏合宿で長野県上伊那郡長谷村にでかけていました。この長谷村は南アルプスの仙丈ヶ岳の登山口としても知られています。先生が実践として考案された、川の流れて身をゆだねて流れていく「人体流し? (natural floating)」が名物と聞いています。

2003年1月23日の先生の最終講義「心に埋め込まれている身体」の冒頭でもお話しされておいででしたが、お父さま(享年101歳)から言われた「お前は人のやっていないことをやりなさい」という言葉をよくされておいでで、私の研究方向も影響を受けています。

先生の研究やいろいろなお仕事の手伝いを通じて、先生の研究の広さ、交友関係の広さを実感しています。学生の頃、ある学会事務局のお手伝いをして、それまでは書籍を通じてしか知らなかった全国の研究者のお顔を直接拝見する機会も増え、有名な先生方のお顔を覚えるだけでなく、自分の顔を覚えていただくことにもなりました。当時、全国の大学院生仲間で研究会などを作り、活動する契機にもなりました。そのため現在も全国にわたり幅広い分野の先生方と交流を持っています。

文学部、人間科学部、人間科学研究科で40年あまりに、春木先生の教えを受けた学部学生、大学院生は、多方面でご活躍です。

これからは、桜美林大学で新たな学生のご指導をつづけられながら、これまでの研究の成果をまとめられるとうかがっております。先生のますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げます。